特54
56

十四編大尾

第拾三編

雲霧五人男

伊東專三編輯

橘塘

稲野年恒画

東京開盛堂
新橋区三十間堀
小林新兵衛

活版印刷開業之御披露

夫れ活版印刷の業といつぱ我國從來使用し来る渠の木版の比に非て最も迅速を旨とする物なれば文物日進歩と共ふ行われて全國中行所として活版印刷社の有らざるなく從つて書籍に業より名刺引札に至る迄活版を用ゐざるおゝ實に盛大の事といふ可し然ゞ故ふ素迅速を旨とする活版印刷社よしく事業の繁盛なる爲に意書り名刺引札書籍類も大に時日を費し反つて因徇ある木版に遲るの景況往々あるゐ嘆えしきの限りならぞや弊店茲に見る所ありて此度活版印刷の業を開き活字に清朝風の鮮明なるを撰び紙に美質なる舶来品を用ゐ至極廉價ふ致すに勿論名刺引札等に最も迅速を旨として活版の本面目を失ざらん様ふ勉め又御譲への祭文に然る可き記者と抱へ置たれば夫れに命じて直ゞ直今ゞ今ふもおん間ふ合せ活版書籍類え又他ふ比較せぬ僅の時日ふて整頓なさせ活版印刷の業に迅速なる物と聞及ぶゝが斯まで迅速に成る物のと四方の諸君をして驚うるゝが如く爲ん書籍の大となく名刺引札の小となく陸續御注文あらんことを單に希望しく止ざる所ろなり

活版印刷所　日本橋區室町三丁目九番地　滑稽堂

明治十七年八月二日御届
全　十八年三月二日出版　定價四錢

編輯人　東京府平民　伊東專三
出版人　東京府平民　吉塲清藏
發兌元　東京千住區柴土八幡町弐番地　東京金玉出版社
大賣捌　東京日本橋區室町三丁目九番地　滑稽堂

第十三編

暗に仝惡に知る稀代の刺繍
道に仝惡と殺す鈴森の雨夜

再說因果小僧の六之助は大坂ふゐつ京都ふ遊びおさ〳〵熊五郎が在所を知んと意と摧く物ならば背蓉音信あらざるに今はえや尋ねあぐみ享保九年の冬のはじめ是非なく大坂を立出て生れ出郷の江戸の空戀しき儘に下り来しは渠鳴屋にて毒惡を逞しふなしゝとき針妙の婦女に認らさ木兎權次は召捕れ自分の惡の顯さつ嚴敷詮義をさるゝとも夢さら知ねば餘熱も冷しおらんと下りしなる可し斯て六之助は其年の十月すゑ江戸へ落附博奕打の社會ふ入て居所狀定めず此首那首ある屋敷〳〵の部屋に其身を忍びゐて其間盜みを事となし三月餘も潛伏をりしが然のみに強く詮索もあらざる様子ふ心喜び久し振ふて芳原の容子を見んと立入し江戸町は二丁目に交り店ではありながら近頃全盛究むると評判のある桔梗屋の店頭へまで来りし丹成程こきが桔梗屋ら登つく一夜遊むんと登る階子も初會の樂み立花といふ的婦にて一夜の春を買たるが此立花は年の頃二十四五ふて美人といふ程にはあらねど趣向あり取廻しえ最と懇切丹て殊にはは因果小僧六之助が意氣な姿と憎からず思へば勤を離れさ

る待遇振の厚かるに因果小僧え此女の事ハ霎時も忘るゝやらず其後繁々通ひつるが或日流連の未刻下り禿便りゞ立花の部屋へ至りて黄色お聲おしモシ六さん内所の旦那が和郎さんにお目ヨ掛つくお話しが爲たいと言てゞ御坐いますかゝ吾儕と一所ヨ離るまでと言ヨく六之助不審顔見を知ずおる此家の主個吾儕ヨ會ゝら来て呉ろとハ何の事とハ思へども引るゝ儘ゝ誘引れ離れ坐敷へ到りく見るゝ此家ハ主個桔梗屋五郎兵衛豫て坐敷ゝ待くゐつ夫と見るより手を上くサアお客様此方へと言かほ六ハ打見やれば豈計らんや是ハ之ヨ絶て久しき旧の主領雲霧仁左衛門で有しかゞ驚く体を主個ハ察し目ハもて知せイザとむかり上坐へ招ず六之助も何氣なき体坐ヨ着ゞ禿ハ茶煙草菓子おんど状運びヨ彼方へ立ヨ々り主個ハ四下見廻しつ聲を窃めて偖いふやう一別以来珍しい六之助如何して茲等ゝ遊んでゐると問掛らヨて膝を進め吾儕が事より首領のこと此吉原で遊女屋の主個ゝ成く御坐らふとハ餘り思ひ掛もねへ。成程然思ふも無理もねへが日外妙見ゞ峯で別ヨくかちむつさり止た盗み心資本のあると僥倖と此桔梗屋の跡式を娼妓諸共買求め先の主個ゝ親族にく便り少いお竹といふ女を妻ヨ貰ひ受け名も五郎兵衛と改めく再度開く桔梗の花秋ゝ野分の風ゝも散ゞ追々繁る繁

昌ゝ今ハ不足もおく消光やう〳〵目が覺め善心ゝ立歸つたる陽報と思ふハ吾儕のみならゞし渠の木鼠ハ吉五郎も配分の金を資本ヨしく今ハ濱町一丁目で立派ゝ米屋をしてゐるが夫ゝ引換和主と熊ハ今に心が治らゞゝ嶋屋でおした惡事の段々夫ゆゝ節角堅くしてゐた木原店の木兎權次も熊の事ゝら尻が割れ召捕ヨ成たといふも達摩の長次が萬澤で御用ヨ成て五人男の面相殘らゞゝしたゆゝ其所で和主と熊五郎何所ヨ如何してゐる事ゝ今日まで音信ないといふも江戸ハ身体ゞ闊敷大かた田舎へ廻つてゐやう早く善心ゝ立返つてと祈ぬ日とても無かりしに先刻一風呂這入ふと湯殿へ行

東京錦耀堂出版社

し丹風呂番が今塞がつてをりますが這入てゐるお客様に立花さんのお客まく六さんといひ男も能く而く刺繍が云々まく實に奇妙で御坐りますらマア御覧遊ばせと言まく設やと意の疑ひ隙間よりして覗て見まば思ふまに違たぬ和主ゆゑ大きに驚き夫となく茲の坐敷へ呼寄さが和主の刺繍に世間無類他に在らふとも思れぬに殊更全累に召捕れ詮義嚴い其中で人目に觸るも構ぬまに其刺繍を出してゐるとい餘りまに横道過るじやおいう會たが丁度僥倖ゆゑ今日から意を更めるう然れば吾儕も及ばずながら一肩入てやらうと思ふが和主の意に如何で有ると親身も及ばぬ異見の言葉流石名たゝる盗賊の首領だ果とぞ思へまし因果小僧にねゝと〳〵感じ如何も首領の仰せの通に嶋屋で惡事を働いた後に此身が高飛せしゆゑ後の始末に知ざりしが吾儕が事から尻が別まに水免までも召捕れ殊に達摩の長次めが上らま社會の人相恰好素生来歴までも言さと有れば迂濶〳〵消光くゐる時に長い正月もおいと思へば首領が被仰御異見丹從ひ向後意を改め真人間丹成ますから何分とも丹此末ともと答ゆる言葉丹五郎兵衛の仁左衛門も安心し夫でに種々〳〵諾へあれど如何離れ坐敷とに言ながら壁に耳ある遊女屋稼業就てに明日察へ来てくま向嶋平岩の横町で庚申塚の側に在る桔梗屋の

察といへば直彼所等で分るうらと猶も窃々諾し合ひ其日に其まゝ別れつゝ偖翌日に成り察に於て二人の者に集會し再度相談究しうへ雲霧に因果小僧を別まに程經し從弟なりと女房お竹に言聞せ吉原揚屋町の湯屋の裏に小意氣な家を買求めを六之助が住居をなし一年餘り年季のある相方立花の證文巻き暇を遣て思ふ仝士夫婦を爲く其上に損料蒲團損料着物も多く仕込て與へしかば因果小僧も恩に感じ思ふ女と夫婦に成り今に堅氣の損料や心を入替善心丹立歸つてに行ひ更め家業大事と精出し三月餘りも送るになん雲霧え今にえや大きに安心なしたり々り去程に立花に因果小僧の女房と成さる後に素の名のお花と改め勤をしさ者ふに似氣おく夜具の上下萬事本夫れ手を借を老實〳〵しく働く程に六之助に自のら身体の間お所ろより开の邊に住む朋友の惡敷者等と交際く下地に好なり御意に能し勸らるまゝ花合に手を出したるが初にて追々陷る賭の道良らぬ事のみなしゝまば勝にたま〳〵負が込み桔梗屋方より配賦またる蒲團衣類も質入して博奕の資本に爲ねどなればお花に大きに心配し異見としても肯ばこそ其上ならず桔梗屋へ無心に行と言るゝに何や何でも夫計りに聞ねば自狂ふ酒を飲み打擲おんどをる事もあり且に營業の品々狀質入おして營業も出来

ざるやうゑ成行さまゝば桔梗屋へ行き五十兩金をば借ゑ来てくれと吟味まどもお花ゐ肯ず其様な事が旦那さんゐ。言ねば外ゐ詮方がおいゆゑ茲なる家を曾拂ひ何處へ成とも立退計りざ。アレ又和郎が例の無法茲、の家と〻旦那さんゑ買〻貰つた物で有るを自儘ゑ賣てゐいよいよ濟ぎ。夫でゐ桔梗屋へ行て来るゝ。如何も是をば旦那さんにゐ。言まぬとならば賣〻仕舞ゝと退引させぬ本夫の權威ゐ詮方なけまば女房ゐ身姿を繕ひ江戸町の桔梗屋茲家の内所へ至り主個五郎兵衛ゐ會しうへ六之助が此頃の不品行箇様〳〵と委敷演べ斯いふ譯ゐて營業も致さずをり〻云々と話す丹雲霧度息吐き六之助の意が戻り良からぬ朋友と交りて賭ゑ耽るといふ事ゐ蹤々尊ゑ聞〻ゐて因つた物だと思つてゐたが夫ゐど迄丹亂暴とゐ今日まで一点も知ゐんざ夫でゐ捨〻置まぬとお花狀紫内に打連立ち六が家へと行々るに六之助も夫と見て今更面目あらぬ体をマア此方へと二階へ呼上げ細々異見を加へしゐ是から酒も博奕も斷〻辛抱しますと言々る丹其場で渠がいふがまゝ〳〵五十兩金與へて歸りぬ斯〻六之助ゐ辛抱をるのと思ひの外堅くしさるゐ僅の中忽地元の圭阿彌と成ゆき金の欲き度毎お花を使ゐ桔梗屋へ度々やつ〻無心をいふも元ゐと言ば一つ社會ホンの自分の舌先で大身代の

桔梗屋を寐かさうと起さうと心の儘に成ることゆゑ斯る舉動なすゐる可しとゐ知ねども女房お花本夫が募る不品行に今ゐほど〳〵愛想と盡し五郎兵衛方へ至りつゝ末の認のない男如何ぞ緣とば切〻くれ再度此方のお店へ出く稼でゐまゝが氣が安く〻と女の方から言出せしゐコリヤ能々の事おらんと雲霧ゑ不憫丹思ひ殊丹ゐ胸に一物あまば一人點頭承知なし然いふ事なら六之助に如何とゑ話〻ば試して遣から和女ゐ此方丹ゐるが能と家へ留置自己ゐ揚屋町の六を音信吾儕の異見を用ゐず不品行ゐ治らぎ朝ても暮ても貧々と計り言て来られ吾儕の方でも金ゐ繼かぎ殊ゑお花も愛想を盡し再度店へ出てへと言から彼女が事ゐ思ひ切り吾儕の方のら身代金百兩やる故茲を立退二三ケ年ゐ田舍へ行き遊んで来ゑゐ呉まいかと言るゐ深き了簡の有る事とも一点知ぬ因果小僧ゐ世帶を倦み金に因つてゐる事なれば百兩といふ餅と聞より一議ゐ及ざず了承し散々お世話ゑ成さ上又ゑ女房お花まで買戻したる其金狀吾儕丹下さまを遊んで来いとゐ有難い其仰せ如何も遠くへ行ますから何卒只今の其金狀。承知とあまば遣ふ々まど今でゐ吾儕が手元ゑおしゃ言ゐ神奈川の三橋へ鞍替もの狀二人やつさ身代金を二百兩取ねば成ぬ事があるゆゑ是から和主を送ゑながらぶら〳〵神奈川ま

で行積りざが一所に行てゐ呉まいうと相談掛るも申刻下り最遅しとゐ思ふ物ゐら否と言れを承知したるゑ五郎兵衛ゐ我家へ歸り足拵へより仕度と整へ胴金造りの刀を横さへイザと誘ふゑ六之助も打連立て吉原狀跡ゐし伴ゐ立出たるゐ實ゐ享保十年六月一日の事なり々り去程ゑ兩人ゐ途中に於て日ゐ暮つ高輪も過ぎ品川へ掛りしとりゐ夏の夜の癖とくポツ〳〵降出すゐ因果小僧ゐ空狀仰ぎ設し首領モウ亥刻過でも有ふのゐ殊更雨も降出し是ぢやア到底神奈川まで行れやうとゐ思へぬゆゑ今夜ゐ茲の驛へ泊り翌日ゆつくり行くゐ如何ですと言ど雲霧聞入を成程降ゑゐ來たものゝ夏の雨ゆゑ當ゑゐ成ぬ殊ゑ夜道ゐ袂凉しく晝より結句増おらんゐ茲へ泊つて又暑き明日の日中ゑ歩行事うゐと言も敢をゐ提燈狀引携先へ立々れば六之助も推辭術おく是非なく跡に從ひ行きぬ左右するうち雨ゐなさ逆々烈敷降來り掲く加へゑ雷さへもおどろ〳〵と鳴出すゐ雷神蟒ひの六之助生さる心地もあらざりしがやうにしゑ鈴が森の死刑場前まで來る狀り落雷一聲耳元ゑ響ゑ撞と落さるゐ大森邊の事なるか因果小僧ゐ吃驚せしが是ゐく雨ゐ小止せしゐ素より兩具の用意もなゝ衣類も強く濡たゑ茲で絞つて行んとて雲霧松の根方へ寄り僥倖ゐして消ざりし小田原提燈枝に掲け衣類

を絞り蠟燭の火ゑて煙艸を飲ながら四下を見れば死刑場の石の地藏ゐ大きく坐し光明點の題目石ゐ草原の中に高く立ち與の方ゑゐ野臥の住居なる可し弦を張り竹の柱を巡りつ濱邊に寄る浪の音囂々として物捜く側ゑ置し長臺の上ゑ首を並べたるゐ何處の賊の成の果ゑやと二人ゐ見やりく愁然さゑ此時いよ〳〵夜ゐ更て丑三つの鐘海ゐ響きうら淋しくぞ見えゐ々る雲霧頻ゐ嘆息してコレ六や此長臺の首を見ろ昨日ゐ人の上今日ゐ自分の上和主も吾濟も惡事と包み堅氣ゑ成ゑ消光くゐまど何時知を御用ゐ成たら首ゐ是なる長臺へ乗らふと思へば惰ねへと言と六之助打消くエゑ縁起で

もねへ首領の述懐是まで脱れく来た身躰其様事が有ま溜る物か。成程和主のいふ通りこいつハ吾儕が惡かつたサア行ふらと煙艸入れ収納て立ふ六之助も共ゐ行んとする折から隙伺窺ひ雲霧が閃りと抜ー大身の白刃聲をも掛ゑ背後より二つゐ成と切附ーが彼方も白徒太刀風ゐ夫と繁ーて身を交ー二三歩飛退き身構へー首領何故此吾儕を何ゆゑとハ知さこと此仁左衛門も堅氣となり生涯無事ゐ消光んと思ふ矢先ま和主ま會ひ設も口からバレくハと思ふが故ふ恩を着せ身の立様ま計つま遣さま夫を恩とも思ゑぎま酒と博奕に身を持崩ー與へさ金も茶々風茶その上度々の無心といふも設や否とでも言さふら惡事を訴へ身の科を脱れやうとする意とハ篤ふ見抜く置たゆゑ女房お花が愛想盡ーを僥倖ふして此方へ引取り百兩やるゝら田舎へ行と欺しく茲まで連出しさハ獅子心中の虫ともいふ此身の害ふ成る和主生して置てハ仁左衛門が枕を高く寐らまぬゆゑ殺ーて安々する積りだと真事を明せど因果小僧ハ驚さもせぎ打笑ひ大身代の桔梗屋が百兩許りの目腐れ金家ゐ無ゆゑ鍬倉までと言のが第一可笑うへ畫を嘯つて夜道と好み此街道へ掛つく来たハ大のた夫と悟つたれど否といふのも不甲斐なく其所で一所ふ出て来た物の大かた此様事であらふと此方も覚ま覚えのある切

味尖い業物を腰まーされば首領とて今ハ許せぬ生命の瀬戸何方が斫るか斫らまるの生死の海もいと近き駒も驛路の鈴が森閣ま見え彩ど海面ふつゞくハ安房か上総國鋸山を見物に茲で相手に成ませうと言ば雲霧片頬ゐ笑み流石ハ吾儕の手下ふく五人男の一人と言るゝ丈まよい覺悟此松ケ枝ふぶら下ー火よりも先へ消る生命觀念せよと振下す白刃を外ー六之助閃りと抜ま砍附る豆ひま劣らぎ勝ざる手練打込時ハ颯と開き閉きてハ又打寄る濱邊の浪の砂を洗ひ磯馴の松の風ふ揉るゝ風情の有て飛違ひ又入亂れ戰ひたる白刃と白刃の丁發矢丁丁發矢と砍結ぶ烈敷戰ひ暇もおく雨ま泥濘ー道の邊の泥と蹴返ー踏辷らし受つ流しつする程に霍時ハ勝負も見えざり々り此時又も雨降り出し篠と束彩ま投るが如く風さへ出る横濕氣戰ひ難義の其上ふ又雷神さへ鳴出せーま六之助ハ生得の雷神嫌ひの事なればいと煩ハーき心地しつ太刀筋漸次ま亂れければ是ゐ氣を得ー仁左衛門踏込み〳〵撃太刀拭受損じさる六之助肩先四五寸砍下らまるつと一聲叫びも敢ず尻居ふ挫と倒またりシテ遣たりと雲霧が起ーも立ぎ乘掛り十々目の刀を刺貫けば虚空を摑み四肢を悶き敢おく息ハ絶ふ々り雲霧ハ吐息吐き血押拭ひて刀を收め因果小僧の死骸をば浪打側まで引ずり行深水へ挫と打込つ斯

して仕舞ゐ跡腹病を大さう骨を折せをつたと一人言つゝ身繕ひしゐよ〳〵降出す雨の足僥倖に〳〵立退さるゐ暁天近き頃なり夕り斯て仁左衛門ゐ我家へ歸り女房お竹とお花とゐ膝近く呼寄て渠の六之助ゐ説得せし丹田舎へ行く遊んで来やうと言ゆゑ路金と持せく出し昨夜品川まで送つく行しゑ互ひゑ別るゝの惜まるゝゐ其所丹袂を分つゑ忍ぴず土藏相摸へ打登り酒汲交しゑ夜更るまで語ひゐ〳〵が六之助が閨房へ入し丹やう〳〵と凉しき夜風ゐ吹るゝが増ならんとく夜明まへ彼方を出て歸り来し最早是まで丹爲たるゆゑ必ず心配する事ゐのゑと真事虚事打混く語り聞すに二人の女ゐ仁左衛門が無慙なる行ひなる〳〵とゐ露知ず術能く他國へ行しと聞より疫病神伏拂ひたる心地せられて安心なし夕り去程ゑ雲霧ゐ六之助が住居の家伏拂ひ些計りなる雑具なんどゐ吾儕が家へ運び附け悉皆片を附さる後お花ゐ又も立花と名と更へ店へ出丹々ゑ(立花の話し此下になし)然ゑば我惡事を知たりし因果小僧を手ゑ掛たれば最早旧惡と知ものなゝと五郎兵衛ゐ心の中ゑ祝び一方ならずしゑ枕を高く何事も素知ぬ顔〳〵ゑ消光〳〵が天網快々疎丹して漏さずゐかで何まで隠れ得可き因果小僧の死骸より事發覺て雲霧が江戸を跡丹〳〵身を隠すその結局ゐ今一編更め漸次ゐ説盡さん